
七英雄物語 5

七英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七英雄物語 5

【Nコード】

N0535E

【作者名】

七英雄

【あらすじ】

不安定な状況の異世界バロゲニアガルド。怪しい動きは加速度を増してあらゆる国にも影響する。そして、アーガス国で出会った者達。運命は止まることなく逃れられない事態へと巻き込んでいく。成長する英雄の物語第5弾！

第5部 託される意志 プロローグ リアローラ

バロゲニア神殿から派遣されたワイズムは、長旅を経てようやく先日滅亡した孤島の島ゲルニア国へ辿り着いた。

ガルド会議への出席に対しての返事が聞けず、調査したところ、国の人間は全員惨殺されて滅亡していたとの情報が入り、ある程度の情報は入ってはいたが、当時の大神官デスペラドは更に詳しい調査をとワイズムを筆頭に数人で編成を組み派遣の命令を出した。亡くなった人間の身元確認や供養も含めて後処理がまだまだ必要だと判断したのだった。

会議が開催される前である。

ワイズムの耳に大神官デスペラドの悲報が届いたのは港から出発する寸前であった。

ゲルニア国への出発を急遽中止し、すぐにでもバロゲニア神殿へ引き返す選択もあったが、一度出された命令を覆すような性格ではなかった。ワイズムは今ある自分の任務を遂行することを選んだのであった。

船に揺られて数日後。ワイズム調査団はゲルニア国へ到着した。

もう静まり返った近くの村に入って行った。無断ではあるが家を借りて宿に使うつもりだった。

村に1歩足を入れた時に不穏な空気が流れた。

ワイズム達の前に、女が1人立っていた。細く背の高い女で、1つの才能ではないかと思うほどの美貌に、そして妖艶で魅力的な身体にワイズムは目を奪われた。真っ先に思うであろう、警戒、不審、全てが後手にまわっていた。

ワイズムが我に返った時は遅かった。彼を残して他の調査団全員の首が飛んでいた。やっと恐怖という感情がワイズムの身体を這い上がってくる。

青い目をした女は、長い銀色の髪をかきあげて、ワイズムに近づ

いた。意識が無くなるくらいの気持ちのいい香りが漂う。

女は妖しく微笑んだ。

瞬間。ワイズムの首は自分の胴体と別れを告げていた。

……と気付いたら、ワイズムは何事もなくその場に立っていた。ワイズムだけではない。殺されたはずの調査団の仲間達も不思議そうに立っている。

だが、ワイズムは理解した。ガタガタを恐怖で身体が震え始めた。仲間達の首に一閃の傷跡が見える。恐らく自分にもあるだろう。これがどういうことか簡単に理解できた。

生き返ったのだ。いや。正確には生き返らされたのだ。あの女によって。

女は驚くワイズムを見てケラケラ笑った。

「さあ、可愛い奴隷ちゃん。これから楽しい復活劇をみせるわよ」

女はワイズム達に言った。意志とは関係なくワイズム達の足が勝手に動く。

「この絶望神四天王の1人、リアローラに付いてきてえ」
ワイズムは諦めてその言葉に従った。

第5部 第1章 忍び寄る脅威 その1

バロゲニア神殿。

8国並ぶ国、今となつてはゲルニア国のように滅亡してしまった国もあるが、8つの国を束ねる中立的な位置に属する神殿。

5年に1度全ての国が集る会議、ガルド会議の開催する場所でもある。

今回の会議では前代未聞の事件が起こった。

大神官であるデスペラドが殺害された。暗殺である。

手引きしたのは、4人いるデスペラドの次男のヴィジョンズ。

それともう1人。8国の内の1国、聖国ドルコルドのマルーン教皇。

この2人が手を組んで、大神官デスペラドを殺害したのであった。暗殺者を使って。

事件が起こった時に持ち上がるのは犯人像。その犯人にあげられたのは、末の息子、グリークスだった。

グリークスが逃走し、父親殺しの汚名をつけられたまま、ルシア達と一緒に旅をしている。

ヴィジョンズへの復讐、父デスペラドの仇を討つために。

グリークスは、静かに機会を待っている。

そんなことはすっかり忘れているヴィジョンズは着々と計画を進めている。

デスペラドの代わりに大神官になる。そして、その補佐役の国としてマルーン教皇がいるドルコルド国を指名する。

全ては計画通りに進んでいる。後は、逃げたグリークスの始末。

そして、秘密を知っているかもしれない人間の削除。

手は打っている。事は間違いなくとも簡単に進むはずだ。ヴィジョンズの野望は目の前まできていた。

父上の息子。

リゾートの悲痛な叫びを聞いても、ヴィジョンズの心は痛まなかった。その息子である自分が真犯人だとリゾートに告白したら一体どんな顔をするのだろうか。

「……そうだな、確かに信じたくはない。だが、証言がある。暗殺者の賊がグリークスを犯人だと言ったではないか」

「そ、そ、それは……」

「……濡れ衣だと後から続きそうだったのでヴィジョンズは無理矢理止めた。」

「とにかくだ。グリークスを捕まえてからわかることだ。その時になつてじっくり話を聞こうではないか」

捕まえる指示などしていない。殺すように指示をしている。そんなことはリゾートには言えるわけがない。

「リゾート。もう休め。あまり考えすぎるんじゃない」

「……う、うん」

リゾートは何か言いたそうであったが、押し止めて部屋から出て行った。

ふうっ、とヴィジョンズは溜息をついた。次なる手を打たなければならぬ。恐らくリゾートは同じような疑問を長男のボーダーに相談するはずだ。

ボーダーはどう思うのだろうか。リゾートに同調するのか、もしくはグリークスを犯人と見るのか……。

いずれにしても障害となるのであれば……手を打つしかない。

ヴィジョンズは目を閉じた。そして、少しだけの眠りへと落ちていった。

つづく

第5部 第1章 忍び寄る脅威 その2

医療大国ルキボル国。

つい前まで王位継承の戦争を繰り返していた国。国王が死に、残された3人の王子が我こそはと戦争を始めた。

結果、長男のミストラスが戦死し、元々王位継承に無関心だった次男オークランドが国王となった。3男のズツケルアは一時的ではあるが牢へ入れられている。

王となったオークランドは現在ルシア達と旅を共にしている。留守となった国は、ペツチエルという老騎士が仕切っている。

内乱が落ち着いた今、ルキボル国は平和な毎日が蘇りつつあった。

それでも日夜の警戒は解くことはない。

内乱が終結してから、ルキボル国へ入国する国境では、念のために入国する者達を確認している。

外部の者がこの状況に乗じて攻めてくる可能性があるかもしれないからだ。

夜。

兵士は2人。イノーリとヒフスは毎晩のように国境の前に立っていた。来るはずもない敵を待っている。

イノーリは大きく背伸びをした。ヒフスも大きく欠伸をする。

「今日も…何事もなし…」

イノーリはいつものように言った。

「あ…そうだなあ…」

ヒフスもいつものように答えた。

2人のこのやり取りは毎日続いている。

「じゃあ…交替で見張りをするか」

イノーリが言いながらヒフスを見た。

そこに。

ヒフスはいなかった。

「え？」

いや、正確には『ヒフスの首』がなかった。

鮮血が飛び、返り血がイノリーの顔にかかる。

飛んだヒフスの首は曲線を描いて地面にドサツと落ちる。

「なっ、ななな」

混乱がイノリーの脳を支配する。何が起きているのか理解出来なかった。あまりの突然のこと、そして危機管理のなさが生んだ混乱だった。それもそのはず戦争には召集されたが戦場には出ていない。イノリーに瞬時に判断させることなど無理な話だったのだ。

そこにこの国の甘さが出た。警戒しているフリで、実際は敵など来ないと油断していたのだった。

だが、内乱が終わり、国自身も疲れているその時こそ、狙われる時だということに気付かなかったのだ。

「そっ、そんな、ヒフス！」

イノリーは転げ落ちたヒフスの首、崩れ落ちる首のないヒフスの身体を見ながら叫んだ。

「……くすくす」

何処からか笑い声が聞こえた。

イノリーはビクツとして辺りを見回した。

そこには、赤い服を着た女の子が、いた。

茶色の長い髪と空のように青い目が妙に合っている。

この場には絶対的に似合わない者だった。

「……え？」

イノリーは拍子抜けした声を出した。しかし、あっという間に戦慄が走る。

女の子の手が服の色と同じくらい真っ赤に染まっていたからだ。

「くすくす……お兄ちゃん……驚いた……？」

嬉しそうに女の子が笑みを浮かべる。

「まさか…き…君が…」

「あたしの名前はプシンって言うの」

にこりとプシンと名乗った女の子は言った。

「このルキボルって国を…潰しにきたの」

「…は？」

プシンは笑みを浮かべたまま指先に少し力を入れた。指先から光が発されたかと思うと光はイノーリを襲った。

イノーリの意識はここで永遠に途切れる。首と身体に別れを告げた。

「くすくす…」

プシンの笑顔はなくなることがなく、そのままルキボル国へ入っていった。

「マルーン様喜んでもらえるかな」

機嫌良くプシンはルキボル国を潰すために乗り込んでいった。聖国ドルコルドの王マルーン教皇の名前を呼びながら。

プシンの後に軍隊が付いていった。絶望の獣、絶望獣ジャムの軍隊。

「また…この国に来ることになるとはな…」

絶望獣ジャムを率いるのは絶望神四天王の1人、獣使いのヌアリス。以前ルキボル国へ来ていたことがある。

「ちよつとヌアちゃん、あたしがやるんだからね、邪魔しないでよ」

プシンが怒った口調で言った。

ヌアリスは鼻で笑った。

「ふっ…ああ…邪魔はしない。好きなようにやれ、プシン」

「くすくす…ありがとー」

それを聞いてプシンはますます笑った。

つづく

第5部 第1章 忍び寄る脅威 その3（前書き）

時間かかりすぎません。

第5部 第1章 忍び寄る脅威 その3

ルキボル国の国境でイノリとヒフスの無残な遺体が発見されたことにより、城は恐怖と驚きと不安に包まれた。

新たな敵の出現。国内での戦争がようやく終結し、身も心も疲れ果てていた国の兵士達には衝撃の事実となった。今度は国外からの侵入者なのだ。

中には国がもうオシマイだという絶望視する声も出て収集がつかなくなっている。

城を、国を、ルキボル国王オークランドから任されている老騎士ペツチエルもその1人だった。

確かに今の状況では、指揮する者はペツチエルしかない。しかし、年離れたペツチエルに国をまとめあげる力は無かった。本人も自覚している。

オークランドのような若くて魅力のある人望もない。オークランドはここにはいない。我が国の王は自分の使命のために今も何処かで戦っている。

オークランドの代りを立てるしかないと言ったペツチエルは判断した。それも同じ王の血を引く者を。

ペツチエルは重々しい独房の扉を開けた。そこには、男が静かに坐禅を組んでいた。

ペツチエルは大きくその男に向けて膝をついた。

「貴方の助けが必要です。力をお貸しください。不在である国王オークランドの代わりとして」

ペツチエルは言った。

男の目が優しく光る。彼の目に過去の野望に満ちた輝きは感じられなかった。まるで別人のようでもあった。

「それは…命令か？ペツチエル…」

男は口を開いた。

「王の命令です」

ペツチエルはしっかりと口調で力強く答えた。決してデタラメではない。

「わかった」

男は立ち上がった。

「我が兄オークランドの命ならば、従うしかあるまい。何があった。状況を説明せよ」

ペツチエルも立ち上がり、外部からの侵入者がいることを説明した。

「わかった。ガルヌも呼ぶことは出来るか？ペツチエル」

「今は、貴方が指揮官です、ズツケルア。貴方の命令に対応しましょう」

オークランドの弟、かつて政権争いで戦争を犯した男、ズツケルア。戦争が終わる際に独房へ入れられていた男、ズツケルア。

国のため、兄オークランドのため、生まれ変わったズツケルアは新たな希望の意志を持って、自らの足で独房から踏み出した。

「お久しぶりです。ズツケルア様」

同じくズツケルアの配下として指揮をしていたガルヌも同様に独房から出されていた。ズツケルアの願いである。右腕として、相談役としていたガルヌはズツケルアにとってはかかせない人材であった。

城の中枢。会議の間。

「ああ、久しぶりだ、ガルヌ。懐かしんでいる暇はない。早速だが、今の事態をなんとかせねばな」

ズツケルアは深刻な表情で言った。

「兄から貰ったこの命、無駄には出来ない。必ず国を守るぞ」

これまでのズツケルアとは違う頼もしさをガルヌは感じた。咳払いをしながらガルヌはペツチエルの方へ向き直った。

「現場での状況は？」

「うむ。イノーリとヒフスの死体があり、軍隊だと思われる足跡が多数…それも普通の足跡ではなく、まるで獣のような跡だったのだ」

ペッチェルの報告を聞いてガル又は手を顎にやり考え込んだ。

「それほどの軍隊なのに、未だ誰も気づかないのはどういう訳だ？」
ズツケルアの言葉にガル又が答える。

「恐らく、我が国の地理に詳しい者がいるのかもしれませんが。隠れようと思えばいくらでも隠れることが出来ます。先の政権争いの中で大打撃を受けた町や村もあるわけですから、もしかしたらそういった中に紛れ込んでいるのかも…」

「或いは、もう既に襲われるかもしれんのう…」
不安そうにペッチェルが言った。

「そうですね、その村や町の人々が全滅していたのであれば、その危機を知らせる者など存在しませんからね」

ガル又はペッチェルに同意した。

「わかった。まずは全ての町村の安全を確かめるぞ。早急に偵察を出すんだ。1人では行かせるな。必ず2人以上の隊を組ませるのだ」
「はっ…」

ズツケルアの指示にガル又とペッチェルは素早く動いた。

1人になったズツケルアは窓の外を見る。

「兄さん…」

ズツケルアは静かに呟いた。

ペッチェルの不安は的中していた。

真っ赤な服を着た女の子プシンと、絶望獣ジャム率いる絶望神四天王又アリスは既にある村を襲っていた。

殺戮。生き残りは誰もいない。着々と城へ向けて進んでいる。
「くすくす… かんたあゝん、全然齒ごたえないわねえ」

返り血を全身に浴びたプシンは無邪気に笑う。笑顔だけを見ればその風貌通りの幼い女の子だ。

だが実際は村人全員を殺害した狂気の幼い女の子。絶望獣の力は借りずに、殺しを楽しんでいる。

「又アちゃん、そろそろ？ねえ、お城はそろそろかなあ？」

プシンの問いかけに、又アリスは振り返る。

「ああ、そろそろだ」

「やったあ！楽しみだなあ。もっと、もっといっぱい殺せる」
嬉しそうにプシンは不気味に笑う。

がさつ。

物音。

又アリスとプシンの視線が鋭く動く。

「ひっひいひい」

兵士が2人恐怖で腰を抜き倒れこんでいた。

ズッケルアの命令で様子を見ていた兵士だった。

「わあああああ」

プシンは玩具を見るような目で兵士を見つめた。

「あつ、あわわわ」

兵士達は必死で逃げようとする。この絶望な事実を伝えに戻らねば。

「きゃはははは、マテマテマテ」

プシンは兵士に襲いかかった。

兵士の目の前が、ぷつん、と真っ暗になった。

つづく

第5部 第1章 忍び寄る脅威 その4

「偵察が1組帰ってこない」

ガルヌが言った。

「ズツケルア様」

ガルヌはズツケルアの方へ振り返った。

帰ってこない1組は城から一番近く、そして正面に位置する方向だった。それが何を意味するのか、敵は正面から、更には目と鼻の先まで近づいていることがわかる。

頷いたズツケルアは覚悟を決めたのか口を開いた。

「来るぞ。敵は正面からくる。ペツチエル、戦闘態勢をとれ、兵士を正面に集中させる」

「はっ」

ペツチエルは返事をすると言示をしに行動を始めた。

「余程の自信があるんですね、正面からなんて」

ガルヌが考え込みながら言う。

「うむ、何者で、何の目的なのかもわからぬ。兄がいない時というのも計算通りなのかもしれないな」

ズツケルアも同意した。

「しかし、かといって我が国を脅かす者は誰だろうと許すわけにはいかない。まして一時的にでも国を預かる立場が弱気になってる場合ではない」

力強くズツケルアは言った。その言葉に強く重い責任感のある気持ちが入められていた。

しばらくして、ペツチエル指揮の下、兵士達が城正面へ集められた。時間もそんなにかかっておらず兵たちの素早い動きにペツチエルの統率力の高さがわかる。

正門を完全に閉め切り、戦闘態勢は整った。

「準備ができたようですね、ズツケルア様」

「ああ、戦場での指示はペツチエルに任せてある、我々は状況を把握し、全体的に的確な指示を出さねばならない、頼むぞ、ガルヌよ」
不安そうにズツケルアはガルヌを見た。

「全員静かに待機せよ」

ペツチエルの命令に従う兵達。辺りはシンッと静寂が漂う。

……。。

数人の兵士が不穏な空気を感じ取った。

当然、ペツチエルもその1人だった。

……。。

「静かに……」

何かが聞こえる。

全員が貝のように口を閉じ、岩のように身体を止めた。

……。アア。アアアア。

ア。アアアア。アアアア。

雄叫びのような、怒鳴り声のような、地響きのような、そんな音。
だんだんと近づいてきている。

尋常ではない音を感じて、明らかに兵士達の動揺が伝染している。
落ち着けと部隊の隊長が制しても、その本人も心のどこかで冷静さを失っていた。

その音はもつと大きくなってきた。

アアアア。アアアアアアアア。シャアアアアアアア。

これは音ではない。咆哮だ。獣の咆哮。得体の知れない動物の雄

叫び。

キシアアアアアアアアアアアア！

正門が揺れた。

雄叫びと一緒にドオオオンと門へ体当たりをしている音が響く。

ドオオオン。

ドオオオン。

何度も何度も繰り返す鳴る。

門に亀裂が入った。

「落ち着けえええい！戦闘準備いいい！」

ペツチエルが吠えた。

動揺している兵達の恐怖を抑え込んで剣を抜き、槍を用意し、盾を構える。

門が…。亀裂が広がる。ギシギシ。ビキビキ。

「来るぞおおお！」

門が破壊され、溢れんばかりの生き物が傾れ込んできた。

キシヤアアアアアアアアアア！

絶望の獣。

絶望獣ジャム。

さすがのペツチエルも思考回路が一瞬止まった。

その一瞬が命取りだった。

「…オークランド…王よ」

この言葉がペツチエルの最期の言葉となった。

絶望獣の爪がペツチエルの身体を簡単に貫き、他の数体の絶望獣も同時にペツチエルを貫いた。捨てられるかのようにペツチエルの身体は宙を舞い地面に叩きつけられた。

文字通り一瞬の出来事だった。戦場の指揮官がいとも簡単に葬り去られたのである。兵士の士気などどうやって上げることが出来るのであるのか。

「うわああああああああああああああああああ」

ほとんどの兵士達が叫び、戦意喪失した。容赦なく絶望獣が襲い掛かる。ゲルニア国、バロゲニア神殿に続き、一方的な殺戮が開始された。

「…そんな…馬鹿な」

「なんだ…あの怪物は…」

驚愕のズツケルアとガルヌ。何もかもが予想外だった。「敵」とはいつでも人間ではないなんてわかるはずがない。それも圧倒的な力を持っている。

「……うう」

何もできない。できるわけがない。ズツケルアは真っ青になっていた。

ガルヌも対策を頭の中で巡らせるが、何も浮かんではこなかった。

「くすくす…」

女の笑い声が聞こえた。

女の子がそこに立っていた。

寒気がズツケルアの身体を通過する。

敵。

疑うことなどない。この状況で不敵な笑みで現れるのだ。敵ではなくてなんなのか。

「初めましてえ、あたしプシンって言います」

女の子は名乗りながらズツケルア達に向かって歩き始めた。

「いきなりだけどお、この国あたしがもらったよ、くすくす…」

プシンは人差し指を唇に当てて「ん」と言いながら考え込む。

「とにかくう、まずは全員にい、死んでもらうねえ、うふふ」

プシンは無邪気に笑った。その顔がますます不気味に見える。

恐怖と絶望がズツケルアの脳裏に入り込む。

「……オ、オーランド……兄さん……」

ズツケルアは呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0535e/>

七英雄物語 5

2010年10月11日02時22分発行